

エジプト学研究第 18 号 2012 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.18, 2012

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
第 4 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・西坂朗子・高橋寿光	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第 16 次・第 17 次発掘調査—	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・馬場匡浩・西本真一・柏木裕之・秋山淑子	21
2011 年太陽の船プロジェクト活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	69
〈研究ノート〉		
両面加工石器製作の生産体制について		
—ヒエラコンポリス遺跡エリート墓地出土資料の分析から—	長屋憲慶	77
〈卒業論文概要〉		
岩窟墓の形態変化とアマルナ時代の影響	熊崎真司	85
〈活動報告〉		
2011 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		93
2011 年 エジプト調査概要		97
〈編集後記〉	近藤二郎	103

The Journal of Egyptian Studies Vol.18, 2012

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA	3
Field Reports		
Preliminary Report on the Fourth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian ExpeditionJiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI		5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Sixteenth and Seventeenth SeasonsSakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Masahiro BABA, Shinichi NISHIMOTO, Hiroyuki KASHIWAGI and Yoshiko AKIYAMA		21
Report of the Activity in 2011, Project of the Solar BoatHiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA		69
Articles		
Bifacial Flint Production Groups in the Predynastic Egypt: Analysis of finds from Elite Cemetery at Hierakonpolis	Kazuyoshi NAGAYA	77
Summary of the Recent Undergraduate Theses		85
Activities of the Society, 2011-12		93
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2011		97
Editor's Postscript	Jiro KONDO	103

岩窟墓の形態変化とアマルナ時代の影響

熊崎 真司*

1. はじめに

第18王朝からラメセス朝時代にかけて、テーベ・ネクロポリスの岩窟墓¹⁾（以下、テーベ岩窟墓）には様々な形態的变化がみられる(Assmann 2003, Kampp 1996; 2003, Seyfried 1987, Strudwick 1994)。岩窟墓の上層部、中層部、下層部にわたってみられるこういった変化は、アマルナ時代を画期に生じたものとされている。これまで、このような変化を根拠に、古代エジプト人の死生観が、アクエンアテン王の宗教改革を経て、いかに変化したかが論じられてきた。

ただし、ここで問題となるのは、そうした影響下にあったアマルナ時代に、テーベで岩窟墓の造営が行われなくなったことである。テーベにおける岩窟墓の造営は、アマルナ時代終焉後に再開されたものの、ここには一定の断絶が認められる。テーベ岩窟墓にみられる変化が、アマルナ時代の影響に起因するものだとすれば、相応の変化がアマルナ時代にも存在した可能性が高い。

卒業論文では、テーベの資料を主体とした従来の研究で焦点の置かれにくかった「アマルナ時代における岩窟墓の変化」に注目し、岩窟墓の形態的变化とアマルナ時代の影響との関係について考察した。テル・エル＝アマルナの岩窟墓（以下、アマルナ岩窟墓）は、アマルナ時代、アケトアテンの領域東部に造営されたもので、テーベ岩窟墓に代わる同時代の資料としてとらえることができる。同論文では、アマルナ岩窟墓の分析を通して得られた結果が、テーベ岩窟墓にみられる変化との関わりの中でいかに位置づけられるかを検討することで、従来示されてきた見解の再検討を目指した。

卒業論文の章立ては、以下のようになっている。

1. 序論
2. 新王国時代におけるアマルナ時代の位置付け
3. 方法論
4. テーベ岩窟墓の形態的变化に関する先行研究
5. アマルナ岩窟墓の類型と変遷
6. 考察
7. 結論

なお、本概要では、主に第5章「アマルナ岩窟墓の類型と変遷」の内容を中心として記述を行うものとする。

* 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

2. アマルナ岩窟墓の概要

アマルナ岩窟墓は、アケトアテンの領域東部に位置する石灰岩質の断崖に沿って造営された。現在までに、墓としての性格が不明瞭なもの数基を含めて TA1 から TA25A までの合計 45 基が発見されている (Davies 1903; 1905a; 1905b; 1906; 1908a; 1908b; 図 1)。これらの岩窟墓は、王家のワディ (涸谷) を挟んで南北に大きく 2 つの墓域を形成している。

当該地域の石灰岩質はかなり劣悪であるが、岩窟墓には、プラスターを活用した良質のレリーフ装飾がみられる。これらのレリーフには、アマルナ時代以前にはなかった主題に基づくものが多く、アマルナ時代の独自性を示す資料として注目されてきた。

一方で、形態的特徴に関しては、祠堂形態の類似などを根拠に、概ねテーベの伝統との連続性を有するものとしてとらえられている (Aldred 1988: 24)。ただし、アマルナ岩窟墓は、大半が未完成であることもあり、テーベ岩窟墓との関わりの中で十分に扱われにくい傾向がある。

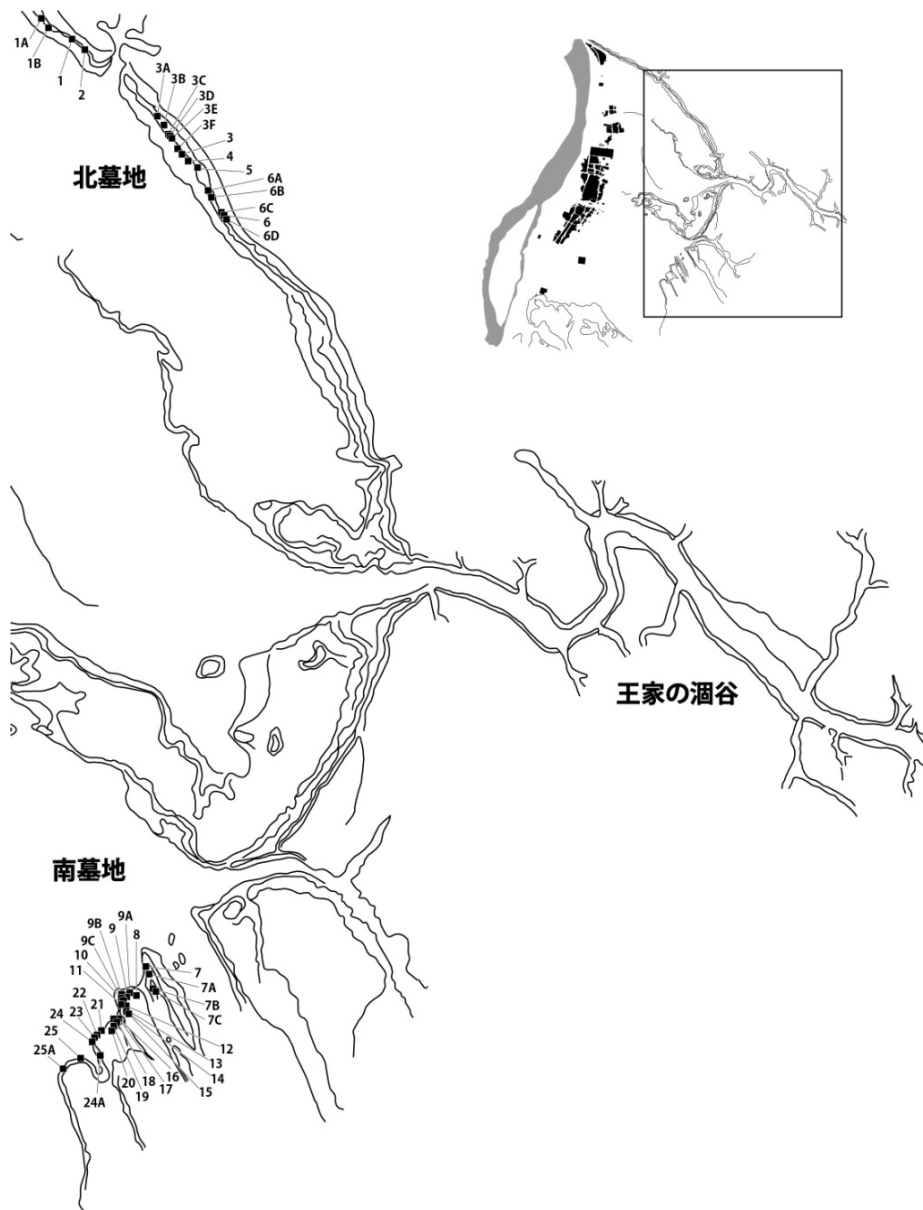


図1 テル・エル＝アマルナ東部の墓域

3. 方法論

3-1. 方針

卒業論文には、アマルナ岩窟墓の変化を、テーベ岩窟墓の変化との関係の中で位置付けるという目的があったが、こうした検討を行うためには両者と同じ枠組みの中で分析する必要があった。それゆえ、アマルナ岩窟墓の分析項目を絞る際には、テーベ岩窟墓の3層構造的な理解の方法を参考にした。

テーベ岩窟墓は一般的に、上層部、中層部、下層部の3層構造で構成されるものと理解されている (Seyfried 1987; Assmann 2003; Kampp 2003)。各層の定義に関しては、前庭部やファサード上部の帰属をめぐって K-J. ザイフリート、J. アスマン、F. カンプの3者間で微妙に差異が存在する²⁾が、卒業論文ではカンプの定義に準拠した。3層とは、すなわち、ファサード上部やピラミッド型構造などで構成される上層部、祠堂や前庭部などから構成される中層部、埋葬用の構造が設けられた下層部を指し、それぞれが、太陽信仰、被葬者の葬送儀礼、オシリス信仰に関わる部位であるとされる。テーベ岩窟墓の形態的变化に関する研究はこうした枠組みに基づいて進められてきた。

分析対象としたのは、中層部にあたる岩窟祠堂の平面プラン、ステラや彫像室などの内部構造、下層部にあたる埋葬用構造である。これらの3項目に関し、それぞれ、類型分類を行い、経時的な変遷の検討を目指した。上層部、前庭部に関しては、アマルナ岩窟墓が未完成であることや地形的な要因³⁾を踏まえ、分析を行わなかった。

3-2. 時期判断の根拠

岩窟墓造営の前後関係を判断する指標として、卒業論文では、岩窟墓壁面の図像と墓の立地を用いた。

まず、1つ目に用いたのは、岩窟墓壁面の王族描写に表現された王女の人数を指標とする方法 (Davies 1905a: 6-8) である。これは、壁面に描かれた王女の人数と境界碑の記述を対応させることによって、岩窟墓の造営開始時期や造営継続期間を絞り込むというものである (表1)。1980年代における境界碑研究の成果 (Aldred 1988: 44-51) を基にこれを修正して活用した。

2つ目に用いたのは、岩窟墓の立地変化を指標とする方法である。これは、上述した図像による編年に基づいたものであり、墓の立地を時間的な経過と結びつけたものである。これに従えば、まず、アクエンアテン王の治世5年以前に南墓地で墓の造営が始まり、治世8年から9年以降になると北墓地南部へと墓域が展開、その後、治世末期にかけて北墓地北部に墓の造営地が移動していったことになる。

これらの方法は、該期の職人が、当時存在した王女の全てを王族描写に反映させたことを前提としているため、活用には慎重な態度が必要とされる。しかし、卒業論文では、王女の数や墓の立地といった要素の変遷が、アテン神の名称や壁画主題の変化と明確な並行性を有する (Aldred 1988:25-26; Davies 1906: 8) こと

表1 王女の数、墓の立地と境界碑に記された年代の関係

岩窟墓に存在する王女の姿が描かれた図像	該当する岩窟墓	境界碑
1名の王女が描かれた図像	TA9(SN), TA11(SN)	M, X
2名の王女が描かれた図像	TA23(SM)	K(治世5年の出来事への言及)
3名の王女が描かれた図像	TA3(NS), TA5(NS), TA8(SN), TA10(SN), TA25(SS)	A, B(治世6年の出来事への言及、治世8年の後記)
3名の王女が描かれた図像と4名の王女が描かれた図像	TA6(NS), TA7(NS)	
4名の王女が描かれた図像	TA1(NN), TA4(NN)	
3名の王女が描かれた図像と4名の王女が描かれた図像	TA2(NN)	

※ SN:南墓地北部、SM:南墓地中部、SS:南墓地南部、NN:北墓地北部、NS:北墓地:南部

(Davies 1905a, 6-8; Aldred 1988, 44-51をもとに作成)

を評価し、時期の前後関係を判定する方法論として採用した。

4. 分析：アマルナ岩窟墓の類型と変遷

4-1. 祠堂の平面プラン

卒業論文では、祠堂から彫像室を除いた部分の平面プランに関して類型化を行った⁴⁾。対象としたのは、祠堂の完成形が全く推測できない5基を除く、計40基である。部屋の構成や柱の様相を指標とした分類の結果、アマルナ岩窟墓の平面プランは以下の12通りに分類することができた(図2)。

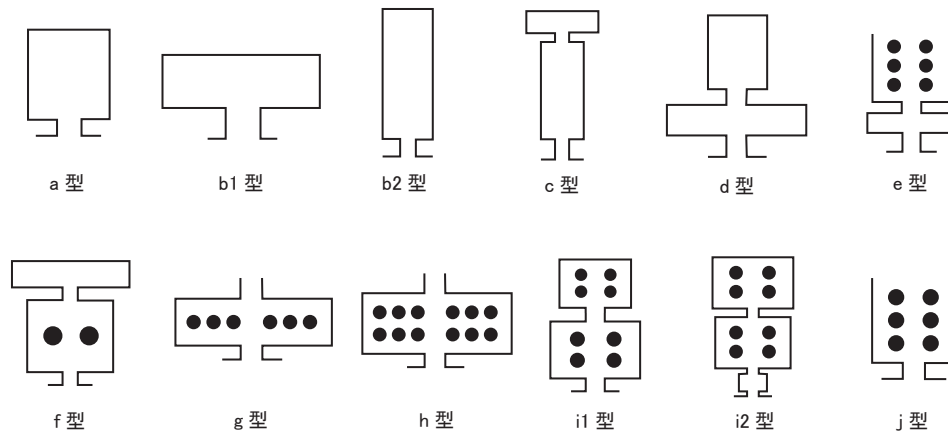


図1 アマルナ岩窟墓の平面プラン

- a型 : 1部屋から構成される最も簡易で小規模な祠堂形態。テーベI型に相当(註5)。
- b1型 : 軸線に直交する形で長く伸びる広間で構成される祠堂形態。テーベIIa型に相当。
- b2型 : 軸線方向に長く伸びる通廊状の広間で構成される祠堂形態。カンブによるテーベ岩窟墓の分類でいうIIb型に相当。
- c型 : 軸線方向に長く伸びる通廊状の広間の奥に、軸線に直交する形で長く伸びる広間が続く祠堂形態。テーベIVa型に相当。
- d型 : 軸線に直交する形で長く伸びる広間の奥に、小規模な部屋が続く祠堂形態。テーベVa型に相当。
- e型 : 軸線に直交する形で長く伸びる広間の奥に、柱列を有する広間が続く祠堂形態。テーベVIb型に相当。
- f型 : 柱2本を有する方形の広間の奥に、軸線に直交する形で長く伸びる広間が続く祠堂形態。テーベVIIa型に相当。
- g型 : 軸線に直交する形で長く伸びる1列の柱列を持った広間を第1室目として有する祠堂形態。テーベVIIa型からVIIc型のいずれかに相当。
- h型 : 軸線に直交する形で長く伸びる2列以上の柱列を持った広間を第1室目として有する祠堂形態。テーベVIII型に相当。
- i1型 : 4本の柱を有する方形の広間の奥に、さらに同様の広間が続く祠堂形態。テーベVIII型に相当。
- i2型 : i1型と酷似し、第1の広間の手前に方形小型の前室を有する祠堂形態。テーベ岩窟墓の類型には該当するものが存在しない。

j 型 : 奥に向けて続く 2 列の柱列を有する、軸線方向に長い広間を第 1 室に持つ祠堂形態。テーベ IX 型に相当。

以上 12 類型の内、出現頻度が高い a 型、b1 型、b2 型、c 型、g 型、h 型の 6 類型は、形態的特徴のみで判断すれば、それぞれ、キャンプの分類でいう I 型、IIa 型、IIb 型、IVa 型、VIIa 型、VIII 型の 6 類型に相当するものであるが、全 40 基の内の 4 分の 3 以上を占める。すなわち、これは、テーベ岩窟墓でみられる平面プランの祠堂が、アマルナにも多く存在することを示しており、両者の近似性が伺える。特に、g 型や h 型のような、いわゆる「神殿型」の祠堂が全体の 4 分の 1 を占めていることから、アメンヘテプ 3 世時代の大型岩窟墓との連続性が推察される。

しかし、祠堂形態の経時的な変化をみていくと、20 年に満たない短期間ではあるものの、幾つかの点で、祠堂形態には大きな変化が生じていたことが分かる。まず、g 型や h 型といった形態の大規模な岩窟墓の造営がアクエンアテン王の治世 9 年頃までの時期に集中していることがあげられる。それ以降、g 型や h 型の岩窟墓は造営されなくなり、より小規模な岩窟墓の造営が増加している。中でも注目すべきは、治世 8 年以降に、北墓地南部で c 型の岩窟墓が造営されるようになったことである。上述のように、この類型はテーベ IVa 型に相当するものである。ただし、この祠堂形態は、テーベにおいて第 18 王朝初期に位置付けられ、トトメス 3 世時代以降、明確な例がみられなくなったものである。こうした背景を踏まえると、アマルナ岩窟墓にみられる c 型は、テーベ IVa 型と関係なくアマルナ時代に独自発展した形態の可能性がある。アマルナ時代以前のテーベにみられない f 型や i1 型、i2 型が造営されるようになるのも治世 8 年以降のことである。

また、もう 1 点の重要な変化としては、テーベ岩窟墓に典型的なテーベ V 型に相当する祠堂形態の消失があげられる。アマルナ岩窟墓において、テーベ V 型に相当するのは d 型であるが、この類型は、アクエンアテン王の治世 5 年以前に造営が開始された TA9 の 1 例を最後に、明確な例がみられなくなっている。

4-2. 祠堂の内部構造

祠堂内部にみられる構造の内、今回は、ステラや偽扉、彫像室といった構造に着目した。

アマルナ岩窟墓には、ステラや偽扉が存在しないとされていたが (Assmann 2003: 51)、今回、45 基全てに関して検証を行ったところ、アクエンアテン王の治世 5 年以前に造営が開始された TA9 に関しては、偽扉状のもの 1 基を含む、1 対のステラの存在を前室に確認することができた。アマルナ時代に、ステラや偽扉が祠堂内部に設けられなくなり、それに替わる構造として、従来それらが配置されていた部位に彫像室が配置されるようになったことは、アマルナ時代後のテーベ岩窟墓における偽扉の消失を論じる際にも重要な変化として言及される。TA9 のような岩窟墓が存在したことは、ステラや偽扉のような構造を設ける習慣が少なくともアマルナ時代の初頭までは存続していたことを示している。

4-3. 祠堂の内部構造

アマルナ岩窟墓に伴う埋葬用の構造としては、ピット、シャフト、スロープの 3 種類があげられる。対象としたのは、埋葬用の構造を有する 16 基である。内訳としては、ピット 2 例、シャフト 6 例、スロープ 9 例となった。アスマンは、アマルナ岩窟墓に伴う埋葬用構造は全てスロープであったとし (Assmann 2003: 51)、この時代に埋葬用構造の主流が完全にシャフトからスロープへ移行したかのような記述を行っているが、これが誤りであることが指摘できる。おそらく、これは、g 型や h 型のような祠堂形態をもつ大型の岩窟墓をばかりを中心に検討を行った (Assmann 1984) 結果であると推測される。

実際、アマルナ岩窟墓における埋葬用構造の変遷をたどってみると、むしろ後の方へ向かうほどシャフト

の件数が増加しているのが分かる。一方で、埋葬用構造と祠堂形態の関係を見てみると、スロープの付属はTA9の例を除けば、g型～i2型のような柱を有する大型で複雑な構造の祠堂に限られる。また、ピットはa型やb1型のような小規模な祠堂に付属していることなども考慮すると、埋葬構造の種類は祠堂の規模と密接に関連したものであり、アスマンが想定したような、シャフトからスロープへの移行というような変遷は、アマルナ時代において起こらなかったことが分かる。

5. まとめ

卒業論文では、アマルナ岩窟墓の中層部、下層部の構造にみられる類型とその変遷を扱ったが、その中で幾つかの重要な知見を得ることができた。以下の項目では、こうした知見をテーベ岩窟墓の形態的变化との関係の中で論じてみたい。

5-1. 祠堂形態の変化と葬送儀礼

今回行った祠堂の平面プランの分析により、20年に満たないアマルナ時代の間にも、岩窟墓の祠堂形態が大きく変化したことが分かった。このような変化には、アクエンアテン王の治世8、9年を境にみられる大型岩窟墓の減少のように、アケトアテンを取り巻く経済状況の変化を反映したと考えられるものもあるが、一方で、来世観の変化を反映したと考えられる例も存在する。被葬者の葬送儀礼に関連した施設である祠堂の形態的变化には、葬送儀礼自体の変化が密接にかかわっている可能性が高い。

そのような例として特に挙げられるのは、アマルナ時代における、テーベV型に相当する祠堂形態の消失とテーベIVa型に類する祠堂形態の発展である。前者に挙げたテーベV型は、典型的なT字型の平面プランとして知られ、新王国時代全体を通してテーベ岩窟墓の中でもかなり一般的な形態であったことが分かっている。こうした形態の祠堂がアマルナ時代の開始後、程なくしてみられなくなる背景には、来世観の重大な変化が想定される。アマルナ時代初頭にはステラや偽扉といった構造が墓に付属しなくなったが、こうした変化とも無関係ではないと考えられる。アスマンは、ステラの記念碑的役割や来世に通じる通り道としての偽扉の役割を、第18王朝のT字型祠堂と関連付けて論じている (Assmann 2003: 48) が、こうした概念に生じた変化が葬送儀礼、ひいては祠堂形態にも影響を与えた可能性がある。岩窟墓における偽扉の消失は、アマルナ時代の宗教改革による来世の否定が反映されたものだと思われる (Hornung 1992)。すなわち、来世の存在が否定されたことにより、通り道としての偽扉は必要でなくなったものとされている。

一方、アクエンアテンの治世8年以降にみられるc型の祠堂形態は、トトメス3世時代頃までみられるテーベIVa型に酷似しているものの、時期的に大きな隔たりが存在することから無関係のものであると考えられる。こうした状況は、前者がアマルナ時代において独自発展した形態であることを示唆しているといえよう。また、テーベIVa型の祠堂が、アマルナ時代以降再びみられなくなるという点を踏まえると、c型の祠堂は、アマルナ時代独自の思想を反映して発展したもので、アマルナ時代の終焉に伴って造営されなくなったのではないかと考えることもできる。

5-2. 祠堂の内部構造

アマルナ時代前後における下層部の変化としては、しばしばシャフトからスロープへの埋葬用構造の変化が取り上げられる。こうした変化については、スロープをソカルの大祭に関連した構造としてとらえる立場 (Assmann 2003) や冥界を再現した構造としてとらえる立場 (Seyfried 1987) などが存在するが、いずれもシャフトからスロープへの変化を来世観の変化という立場から説明しようとする点で共通する。アスマンは、シャフトからスロープへの移行がアマルナ時代に完了したと捉えているが、今回の分析によって、それ

が誤りであることが分かった。また、アマルナ時代以降、テーベ岩窟墓では、スロープが主流になるものの、シャフトが完全に廃れたわけではない。

今回、アマルナ岩窟墓の下層部について検討を行ったことで、下層部は祠堂の規模と密接な関係にあることが分かった。このことから、下層部の種類は墓の所有者の志向以上に、経済力によって規定される要素であったと考えられる。こうした視点を踏まえると、シャフトからスロープへの移行という問題は、思想面の変化だけでなく、墓の所有者の経済力といった側面からも説明がなされるべきであるといえる。確かに、アマルナ時代後になると、相対的にスロープの占める割合が増加し、テーベ岩窟墓では主流となるが、実際にスロープを伴う岩窟墓がアマルナ以前に比べて急増しているというわけではない。アマルナ時代以降になると、テーベでは大幅に岩窟墓の造営が減少する。下層部の変遷が、スロープに対する志向の増大によっているのは否定しないが、スロープを設けることの出来ない人々による墓の造営の減少という観点からの説明も可能なのではないかと今回の得られた予察である。

5-3. テーベ岩窟墓の変化とアマルナ時代の影響

第18王朝末期から第19王朝初期にかけて、テーベの岩窟墓には様々な形態的变化が指摘されている。中でもよく知られた例としては、先述した下層部の変化や、上層部におけるピラミッド型構造の発展 (Assmann 2003, 51; Kampp 1996, 95-109; 2003, 9)、中層部における神殿的要素の採用 (Assmann 2003, 51; Kampp 1996, 58-81; 2003, 9-10) などが挙げられる。こうした変化を、アスマンは墓の神聖化 (Assmann 2003)、キャンプは墓の私的葬祭殿化 (Kampp 2003, 10) として論じている。こうした変化の背景にはアマルナ時代の影響が想定されてきたが、今回行ったアマルナ岩窟墓の分析によって、アマルナ時代の間にも岩窟墓に大きな変化が生じていたのを指摘することができた。ただし、こうした変化は必ずしもアマルナ時代以降のテーベ岩窟墓の変化につながるものばかりではなく、アマルナ時代後に再び放棄された要素も存在する。凶像表現や宗教観に重大な変化がみられた一方で、実際の葬送儀礼などは従来の伝統に従っていたという可能性が指摘されるアマルナ時代であるが、被葬者の葬送儀礼と強く結び付く祠堂の変化からは、やはり、そうした習慣にも変化する部分が存在したのだと推測できる。岩窟墓内の壁画にみられるアマルナ時代後の変化を扱った D. カイザー＝ゴーは、ポストアマルナにみられるアマルナの主題から伝統的テーマへの回帰を再発展と表現している (Kizer-Go 2006)、同様の変化が岩窟墓の形態にも起こっていたのではないだろうか。N. ストラドウィックは壁画の変化の過程にみられる、アマルナの要素の放棄、伝統への回帰という過程は古代エジプト人が墓のあり方を再考する一種の契機となった可能性を指摘している (Strudwick 1994) が、アマルナ時代後に生じるテーベ岩窟墓の形態的变化もまた、こうした中で起こったものであると考えられる。

6. おわりに

卒業論文では、岩窟墓の形態的な部分に関心が偏り、壁画や文字といった要素を十分に検討した研究に発展させることができなかった。また、テーベ岩窟墓の形態的变化を扱いつつも、実際に分析したのはアマルナ岩窟墓であり、テーベ岩窟墓については先行研究の検討にとどまってしまったことが反省される。

今回、下層部の変遷に関して被葬者の経済的能力に絡めた予察を行ったが、こうした視点を踏まえた上で岩窟墓の形態的变化を議論していくのは今後課題とすべき部分である。

註

- 1) 岩窟墓 (Rock-cut Tomb) は、「岩に穴を穿って造営した墓」を指し、広義では岩窟式の王墓なども含めて呼称する。一方、狭義の岩窟墓は、上部構造に岩窟祠堂 (chapel carved out of the living rock) を持つ墓 (Dodson and Ikram 2008: 38) を指し、

王家の谷の王墓などは範疇に含まない。卒業論文で主に扱った先行研究では、テーベのいわゆる「貴族墓」を指して岩窟墓という用語が用いられており、王墓は議論の対象とされていない。同様の視点でアマルナ岩窟墓の分析を行った同論文では、狭義に準拠した。

- 2) ザイフリートは、上層部にファサード上部を含めない点で、アスマンは前庭部を上層部に含めている点でキャンプの定義付けと異なっている。
- 3) 立地する地形の影響で、上層部の構造や堀込式の前庭部を設けるのが困難であったとされている (Assmann 2003: 51)。
- 4) 理由は2点あげられる。第1に、アマルナ岩窟墓に付属する彫像室は、しばしばテーベ岩窟墓におけるステラや偽扉などと対比される構造である (Assmann 2003: 51)。第2に、検討した限り、彫像室はアマルナ岩窟墓において基本的に平面プランを問わず付属する可能性のある構造だった。以上2つの理由から、彫像室は類型化を行う際の決め手にはなり得ないと判断した。

参考文献

Aldred, C.

1988 *Akhenaten: King of Egypt*, London.

Assmann, J.

1984 Das Grab mit gewundenem Abstieg. Zum Typenwandel des Privatgrabs im Neuen Reich, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 40, Mainz, pp.277-290.

2003 The Ramesside tombs and the construction of sacred space, in N. Strudwick and J. H. Taylor(eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, London, pp.46-52.

Davies, N. d. G.

1903 *The rock tomb of el-Amarna I: The Tomb of Meryra*, London.

1905a *The rock tomb of el-Amarna II: The Tomb of Panehesy*, Meryra II, London.

1905b *The rock tomb of el-Amarna III: The Tomb of Huya and Ahmes*, London.

1906 *The rock tomb of el-Amarna IV: The Tomb of Penthu, Mahu, and Others*, London.

1908a *The rock tomb of el-Amarna V: The Tomb of Smaller Tombs and Boundary Stelae*, London.

1908b *The rock tomb of el-Amarna VI: The Tomb of Parennefer, Tutu, Aÿ*, London.

Dodson, A. and Ikram, S.

2008 The tomb in Ancient Egypt : royal and private sepulchres from the early dynastic period to the Romans, Thames & Hudson.

Hornung, E.

1992 "Zur Struktur des ägyptischen Jenseitsglaubens", *Zeitschrift für ägyptische Sprache und Altertumskunde* 119, Berlin, pp.124-130.

Kampp, F.

1996 Die thebanische Nekropole: zum Wandel des Grabgedankens von der XVIII. bis zur XX. Dynastie, 2 vols, Mainz.

2003 The Theban Necropolis: an overview of topography and tomb development from the Middle Kingdom to the Ramesside Period, in N. Strudwick and J. H. Taylor(eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, London, pp. 2-10.

Kizer-Go, D.

2006 A Stylistic and Iconographic Analysis of Private Post-Amarna Period Tombs at Thebes, Graduate Division of the University of California, Graduate Division of the University of California, Berkeley.

Seyfried, K. -J.

1987 Entwicklungen in der Grabarchitektur des Neuen Reiches als eine weitere Quelle für theologische Konzeptionen der Ramessidenzeit, in J. Assmann, G. Burkard and V. Davies(eds.), *Problems and priorities in Egyptian archaeology*, London, pp. 219-253. Strudwick, N.

1994 Change and Continuity at Thebes. The Private Tomb After Akhenaten, in C. Eyre, A. Leahy, and L. M. Leahy(eds.), *The Unbroken Reed: Studies in Honour of A. F. Shore*, London, pp.321-336.

エジプト学研究 第18号

2012年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.18

Published date: 31 March 2012

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University